

# 「第7回まことの保育全国セミナー」開催報告

保育連盟研修委員会



2019年6月20日(木)・21日(金)の2日間にわたり、「第7回まことの保育全国セミナー」が築地本願寺で開催されました。今年も「まことの保育」を推進する102名の先生方が全国より参加され、これからの保育・幼児教育のあり方等について、ともどもに学びを深める機会をいただきました。

—1日目—

講演①

「まことの保育」を考える

いわがみかずのり  
石上和敬 先生

築地本願寺本堂での開会式の後、会場を第二伝道会館蓮華殿へと移し、講演①『「まことの保育」を考える』の講題で、武蔵野大学教授・同附属幼稚園副園長の石上和敬先生にご講演いただきました。「まことの保育」の理念である①親鸞聖人の生き方に学ぶ、②生かされているいのちにめざめる、③ともに育ち合う。この②と③に深くかかわる仏教の「ご縁」についてお話をいただきました。

人間は多くのご縁に生かされています。たとえば、生きていく方とのご縁、すでに亡くなった方とのご縁、人間以外の多くのいのち、自然のめぐみ、自分にとってよ

いご縁・厳しいご縁。石上先生は「現在の自分は本当にさまざまな人々・生物や事象などの多くのご縁に生かされている」という自覚が大切であると話され、仏教思想としての「縁起」について詳しく丁寧に解説くださいました。

続けて、「縁起」を私たちが見極めることは困難ですが、宇宙のあらゆるものは時間的にも相互の関係としても結びつき合って存在しているのだから、「バラバラに存在しているようであっても個別に単独で存在しているものはない」というこの世界の真実のあり方を示す思想を表現する言葉であると述べられ、時間的なつながりと互いの存在が同時的につながり合っているという二つの自己存在を規定するとともに、仏教徒として生きる道を明らかにする奥深い原理が、「縁起」の二文字に集約さ



石上和敬 先生

れているということを教えてくださいました。

また、自他が相互に、無尽に影響を重ね合いながら存在しているという「帝釈天の網（インドラ・ネット）の喩え」を繰り返し話され、ご縁は「不可思議（凡夫が思いはかることのできないもの）」であり、この不可思議なご縁に支えられている不可思議な自分に「気づく」ときが、「まことの保育」の原点になるのではないかと締めくくられました。

## 講演②

「かかわる」ということ ～二人称的保育の入門～

佐伯 胖先生  
さへき ゆか

講演②では、田園調布学園大学院教授の佐伯胖先生より、『かかわる』ということ～二人称的保育の入門～という講題で講演いただきました。

はじめに、村井実氏の【「手細工モデル」と「農耕モデル」】を引き合いに出して、「育む」とは本来、「ブドウのツルが種から芽を出して自分で伸びていく力を持っているものを、はたから世話してやるように子どもを育むことが教育だ」とする『「農耕モデル」であるはずだが、現行の「幼稚園教育要領」等は「あらかじめその」で



佐伯 胖 先生

「きあがり」の形をイメージに描き、それに向かつて子どもを形づくるのが教育だ」とする。「手細工モデル」になっている、と鋭く指摘されました。

また、インクルーシブ教育のはじまりである「サラマシカ宣言」に言及し、一人ひとりの子どもが独自に「善くありたい」と訴える権利をもち、私たちはその訴えを聴き入れる義務を負うのならば、大人がかかげる「望ましい姿」に子どもを導くことは子どもの権利を侵すことになる。したがって、「育む」とは子ども一人ひとりのユニークな特性、関心、能力および学習のニーズ（「善くなりたい」訴え）を聞き取ってそれに「応える」ことを意味しており、私たちはその義務を負うということである、とされました。

その「応える」ということが「二人称的にかかわる」

ということだとしつつ、赤ちゃんを観察・実験の対象としてきた発達心理学では、これまで赤ちゃんを「三人称的」に見てきたこと、一方、赤ちゃんは「二人称的対話」を求めていることを示したうえで、日本の保育には根本的に「対話」がないことを指摘されました。

「二人称的保育」とは、まず子どもがやっていることを、子どもに「なって」共感的に見ることからはじめることであり、「なって」初めて見えてくるその子なりの「よく生きようとしている」ことに援助をしていくこと、一人ひとりの「おもい」に寄り添うことだ、とお話しいただきました。

### 講演③

#### 幼児教育無償化がもたらす園経営の未来

〜待機児童ゼロが園経営に与えるインパクトとは〜

桑戸真二先生  
くわとしんじ

2日目は、9時からの讃仏偈の勤行に引き続き、株式会社福祉総研 代表取締役の桑戸真二先生より、『幼児教育無償化がもたらす園経営の未来〜待機児童ゼロが園経営に与えるインパクトとは〜』と題して講演③をいただきました。

昨今の待機児童ゼロ政策により、これまで毎年10万人

以上増やされてきた保育園等の入所枠にそろそろ終止符がうたれ、これからは少子化の進行によって入所児童が減少し運営が厳しくなる園が増加してくるとのお話から「経営的に今何をしなければならぬか、それぞれの園が考えていく必要がある」と提言されました。

また、幼児教育無償化の問題については、消費増税の問題などまだまだ流動的な未知性の部分を含みながらも行政はどんどん進んでいる中で、「保護者は『利用者の特権』として、教育施設に対する意識を高めており、認定こども園でも『1号』が有利か『2号』が有利か、保護者が探り、選び始めている」と指摘されました。

「副食費」の問題についても、関係者内で丹念に検討・議論する必要がある点に言及されたうえで、「各園・各地域で、市町村とどう交渉するか、という大切な課題が



桑戸真二 先生

ある」と述べられました。

大人人口減少時代を迎え、園長が自身の意識を変えていくことが（難しい課題ではあるが）求められています。

桑戸先生は、それを「来たる時代を見通す力・予測する力」とされ、いま園経営者に求められているものを明確にされました。志村けんが「最初はグー」を世に広め、明石家さんまの「バツイチ」、桑田佳祐の「ニューハーフ」、とんねるずの「元カレ」、さだまさしの「目が点」、手塚治虫の「シーン（静かな様子を表す擬音）」など、時代の寵児がオリジナルの言葉を世に広めたように、時代にフィットするものを見出す・作り出す力が求められています。また同時に期待されていることを教えてくださいました。

